

硬式野球部

穴倉 正胤，宮崎 勝

1978年に発刊された野球部誌によれば、1923年、千葉医学専門学校が千葉医科大学に昇格し、翌年の1924年に野球部が創設され初代の部長は当時皮膚科教授の佐藤邦雄氏とある。

当時、専用のグラウンドは無く、千葉師範学校（現千葉大学教育学部）のグラウンド（現千葉県文化会館の建っている所）、千葉中学校（現千葉高校）のグラウンド、省鉄（現JR）の機関庫のグラウンド（現千葉駅の建っている所）等を借りて練習をしていたそうだ。勿論未だ医大リーグ等はなく、千葉中学（現千葉高校）、成田中学（現成田高校）、銚子商業、千葉師範（現千葉大学教育学部）、ヒゲタ醤油等と練習試合をしていたそうだ。

1927年に現在のグラウンド（元は水田だった）が完成した。慶応大学医学部、東京大学（全学、医学部には現在も硬式野球部は無い）、大阪大学医学部、東京商船学校（現東京海洋大学）、京都大学（全学）、学習院大学、東京医専（現東京医大）、日本大学等とも試合を行い、なかにはある時期定期戦として戦ったものもあったそうだ。

試合ではなかりの戦績をあげ、千葉大学医学部野球部の歴史上最強の時代だったと思われる。

1928年、部長は小池敬事氏。

1930年秋、慶応大学が挑戦してきたと小林金市大先輩の言にある。その部分をそのまま引用させて頂く。

「昭和5年の秋、慶応大学が挑戦して来た。現在と違って、プロ野球もノンプロ野球も無い時代で6大学の覇者が文字通り日本一の強いチームであった。腰本名監督に率いられる慶応の野球部は、その秋強敵早稲田をも一蹴して、名実共に日本一を誇っていたのである。宮武、水原、井川、上野、塚越、山下、楠見、牧野、小川、本郷、川瀬、町田、三谷、梶上等の名選手が揃っていて、後にはプロ野球の代表選手となった面々である。現在我が野球部のコーチを依頼している塚越さんも名投手として慶応のマウンドを守っていた。これが挑戦してきたのだから大変である。選手先輩を含めて何回か相談した結果、受けて立つことに決定した。早速合宿に入った。『学校に出るべからず。禁酒、禁煙、禁欲』をモットーにして、午前・午後にわたって、一心に練習に励んだのである。当時慶応のライバル早稲田の

名監督飛田穂州先生が豊田学生主事のつてで、コーチに来て下さった。先ず最初に『慶応に勝つようにコーチする。相当きつい練習をするが嫌になったらいつでもグラウンドを去れ』といわれた。まず一列に整列させられて、『グラウンドは道場である。こんな石ころのある道場では、練習は出来ない。』といわれ、端から端まで石拾いをさせられた。それからの練習は大変なものであった。我々は文字通り足腰が立たなくなるまで、真暗になるまで、鍛えに鍛えられた。当日はグラウンドに幕を張って有料試合としたのであるが多数の市民が押し掛けて、満員の盛況となったのである。試合は後半まで、終始我が軍が押し気味に進め、流石の慶応勢も、浮き足立って大分あわてだしたのである。結局4対4の9回裏2死後、4球で敬遠する筈の宮武にヒットを打たれて、惜敗したのである。後日芸春秋の誌上にチームワークの尊さの一例として、このわれわれの試合が例証されていた。」とある。

その後も、6大学リーグで優勝し名投手若林（後に阪神タイガースで活躍）を擁する法政大学、明治大学等強力なチームを選んで対戦していたそうだ。

1932年、部長は加賀谷勇之介氏。

1936年、東京近郊の官立大学で官立大学リーグを創ろうということで、東大は6大学加盟のため参加できず、東工大、文理大（現教育大）、千葉医大で官立3大リーグを結成し、1943年第二次世界大戦のため休部するまで続いたそうだ。

1945年8月終戦を迎え、翌1946年9月に学内の運動部としては最初に部を再開し、同1946年10月、千葉、東医、日医、慶応が4医大トーナメントを行ったそうだ。

1947年春には、日大、昭和を加えて関東医大リーグと改称し、春秋二期に総当り各二試合を行うことで発足し、1948年には慈恵が、1950年には東邦が参加し、8大学になった。

1953年には信大との定期戦が始まり、第一回は松本で戦われ敗戦。

1954年、第2回信大戦、2-0で勝利。

1955年からは、全国に先がけて医学部が一期校で6年制になり、医進からも入部できるようになった。1955年秋季リーグでは7戦全勝で医大リーグ初

優勝を飾った。第3回信大戦、敗戦。

1956年秋から防衛大学校との定期戦が始まった。

1957年には横浜市立大が、1958年には順天堂が加盟してきた。

1958年から東日本医科学生総合体育大会（東医体）が夏期に開催されることになった。

1959年春には医大リーグで優勝しその余勢をかつて夏の第2回東医体で初優勝をした。このときのことを1960年卒の阪信氏が回想録の中で次のように語っている。

「春季医大リーグに優勝した我々は今度こそその意気に燃えて猛練習を繰り返した。8月下旬の日大世田谷球場は連日37度以上の猛暑が続いていた。参加16チーム中3日間勝ち抜いて残ってきたのは我が千葉大医学部と岩手医大であった。私はライトを守

り、トップバッターであった。初回、アンダー・ハンド投手の球を三遊間にはね返し走者になった。次の栗原君とバンドエンドランを敢行し、三塁に進んで、4番穴倉の左前安打で生還し先取点をとった。投手－穴倉、捕手－各務、一塁－香西、二塁－山崎、三塁－栗原、遊撃－入枝、左翼－須藤、中堅－植松の布陣であったが、4日間連続のゲームで皆極度に疲労していた。最終回、岩手最後の攻撃は3－2と追い上げられ尚二死満塁でカウント2－3であった。最後の一球、カーンという音とともに白球は右中間を抜くような猛ライナーであった。万事休す、と思ったが私は死にもの狂いで背走した。振り返って手を伸ばすと、白球は我がグラブに『スポッ』と納まった。」

又、特筆しなければならない事は、先に小林金市



1959年8月30日、東医体優勝、於日本大学世田谷グラウンド。
前列左より、穴倉、各務、鴻忠義先輩、塚越保監督、入幸、植松、阪、安達
後列左より、香西、塚田、栗原、堀口、片倉、須藤（現岩倉）、伊藤、（不詳）、山崎
（当時東医体評議委員 青木謹先輩撮影、提供）

大先輩の言の中にあつた、慶応大学の第一期黄金時代の投手であつた塚越保氏にこの年の春季医大リーグ終了後から、監督として、以後長い間面倒を見てもらう事になった。

第7回信大戦、勝利。その後東医体では第6回、第20回でも優勝している。

1960年、部長は綿貫重雄氏。秋リーグ戦優勝。第8回信大戦、勝利。

1961年、第9回信大戦、勝利。

（ここまで文責 1962年卒 穴倉正胤）

1962年、第10回信大戦、敗戦。

1963年、決勝で信州大学を破り東医体優勝。第11

回信大戦、勝利。

1964年、決勝で信州大学を破り東医体優勝。

1966年、春、秋優勝で連覇。第14回信大戦、勝利。

1967年、春、武久投手を擁し古川捕手、瀧澤中堅手、宮原三塁手らのスラッガーで固めたチームが大活躍し医大リーグ初優勝で三連覇を成し遂げる。天神左翼手、長谷川右翼手といった同級メンバーの活躍が光った。第15回信大戦、勝利。

1968年、第16回信大戦、勝利。昭和45年卒のメンバーが抜け檜垣投手、向井一塁手を中心としたメンバーで信州大学戦には活躍するがメンバー数の減少で苦しい時代であった。このときのメンバーには江頭捕手、田沢二塁手らが在籍していた。

第5章 交友の広がり

1971年，第19回信大戦，勝利。

1972年，東洋医大（現聖マリアンナ）新加入。この年から秋のリーグは二手に分かれて予選リーグがあり，各々上位2位までの2チーム計4チームで決勝トーナメントを行い，優勝を決する事となった。第20回信大戦，勝利。（対戦成績10勝9敗1分）

1973年，7年振りの関東医科大学リーグ戦の優勝（秋）。第21回信大戦，勝利。当時の6年生には鈴木二塁手，弓削左翼手が在籍し久しぶりの優勝の味をかみしめる。この当時のメンバー5年生に宮崎遊撃手，西山中堅手がクリーンアップ。投手には宇高，堀部，沼田，捕手には小林といった若いメンバーの活躍が光った。なお他に岩井一塁手，蒔田三塁手，久保田，多田羅外野手等の活躍が見られた。

1974年，部長は松本胖氏。春，秋優勝で3連覇。第22回信大戦，勝利。野球部史上初の女子マネージャー（看護学生：石川真弓，内貴恵子）の誕生となる。

1975年，春，優勝で4連覇。秋，準優勝で5連覇ならず。第23回信大戦，勝利（13勝9敗1分）。

1976年，部長は高見沢裕吉氏。春，秋優勝で連覇。第24回信大戦，勝利（14勝9敗1分）。

1977年，春，優勝で3連覇。第20回東医体優勝—14年ぶり3回目。第25回信大戦，勝利。

1978年，第21回東医体優勝で連覇。第25回信大戦。

1979年

1980年

1981年

1982年，春，準優勝。信大戦，勝利。秋，準決勝敗退。

1983年，春，優勝。信大戦，敗退。秋，準決勝敗退。東医体1回戦敗退（塚越監督ご勇退）

同年11月27日 秋期納会席上塚越コーチに記念品贈呈（同窓会長 小林金市，部長 高橋英世）

1984年，春，準優勝。信大戦，勝利。秋，優勝。

1985年，春，優勝（連覇）。信大戦，敗退。東医体3位

1986年，信大戦，勝利。

1987年，信大戦，勝利。

1988年，信大戦，勝利（20勝13敗1分け）。東医体4位。

1990年，信大戦，敗退。

1991年，信大戦，勝利。

1992年，信大戦，敗退。

1993年，信大戦，勝利。

1994年，東医体1回戦敗退。秋，優勝。

1995年，東医体3位。

1996年

1997年，部長は安達元明氏。春優勝。信大戦，敗退。

1998年，春3位。信大戦，敗退。

1999年，春準優勝。東医体第3位。

2000年，秋，準優勝。

2001年，春第3位。信大戦，敗退。

2002年，部長は宮崎勝氏。

2003年

2004年

2005年，東医体4位。

2006年

2007年，春，優勝。信大戦，勝利。東医体1回戦敗退。

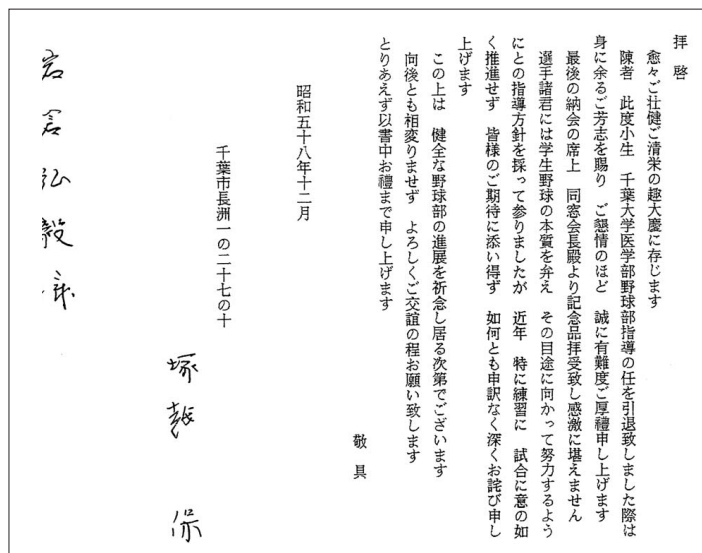
2008年，春，優勝。信大戦，勝利。東医体準優勝。

2009年，春，優勝。信大戦，勝利。東医体準優勝。

2010年，春，優勝。信大戦，引き分け。東医体準優勝。

近年は春季リーグ4連覇，東医体にて3連続準優勝の成績を残している。多くの野球部諸氏の歴史を振り返りながら新たな歴史を作りあげていきたいと考えている。

（ししくら まさたね，みやざき まさる）



塚越監督からの手紙